

蘭とその歩み

春蘭は新潟、エビネは京都、寒蘭は高知がその源流とされています。新潟や京都は、それら蘭の主要な産地ではないですが、地元には有能な先導者、あるいは巨大な資産家、大地主が多くおり、その素晴らしさを啓蒙、普及発展させてきました。

「春蘭」を醸成、発展させた土地は新潟県で、昔から新潟は色々な物の変化を競い、これに金銭を絡める投機的な遊びを伝統とする土地柄、風土だったようです。例えば、「小鳥の鳴き比べ」、「斑入りのオモトや山草」、「十姉妹の羽根の斑柄」、「錦鯉の紋様」等の優劣を競い合い、小銭に変えて楽しんでいたようで、この一連の遊びの中でも際だった物がヤブコウジ（紫金牛）で、それはまるで狂い病のような大ブームでありました。

明治の中頃、米一俵4～5円の時代に、斑入りの優品が一本50～60円で取引され、更に明治30年頃には1,000～1,500円に高騰し、狂気のようなコウジ熱は全県下に広がり、農民達は農業を捨て、一攫千金を夢見て田畑を売り飛ばし、コウジの投資に掛けたといえます。余りの熱狂ぶりに、県は「紫金牛取締規則」を発し、その売買を警察の管轄下に置き、一時期自由売買を禁じたほどで、ブームは以降、大正後期まで続きましたが、昭和に入ると資産家も一般庶民もコウジに飽き、これに替わる新しい遊びを求めるようになるのです。

この投機的風土は、新潟が日本一の地主王国である所から来ていると言われ、戦前の日本には、8人の一千町歩以上の田畑を持つ超巨大地主がおり、その内5人が新潟県人で、米相場への投資などで巨額の富を築いた豪農「伊藤家」「市島家」「白勢家」など、その他にも百町歩以上を有する多くの大地主がいました。

大地主らはこの新潟の地に投機という遊びのおもしろさを植え付けたものの、米相場への数百万円の投資は彼らの遊びであっても、コウジや後の春蘭などの遊びは小さくて対象にはならず、春蘭界で主役となる資産家のほとんどは、せいぜい数十町歩台の小地主でした。

昭和に入るとコウジに替わって徐々に春蘭柄物が全国的に認められるようになり、昭和7年に福島県で発見された「輪波の花」を蘭商の長谷川広松氏が新潟に持ち込まれたことから、大きなうねりとなって第一次春蘭ブームが到来します。この時期、春蘭界を投機市場に演出したのが新潟県長岡の石油商で米穀取引所の娘婿となった小林守三氏で、根っからの相場師であった彼は、品種的に卓越した美しさと強健な性質を併せ持つ「輪波の花」に目を付け、一世一代の投機商品に仕立て上げたのです。彼は昭和8年頃から長谷川氏が持ち込む「虎物」優品を買い集め、特に「輪波の花」の買い占めに全力を傾けるとともに、展示会に出展したりして、その素晴らしさを宣伝、その価格は9年1条400円、10年1,000円、13年2,000円、15年5,000円、18年には1万円という価格で取引され、天井知らずの狂騰を続け、「虎物」のスーパースターとして30年間に渡り君臨することになるのです。

この一大投機商品になった要因は、その葉芸と旺盛な繁殖力で、買い占めた小林氏の屋敷前にはバルブ一個でもと望む全国からの蘭商や投資家がひきも切らず訪ね、門前市をなす有様で、3本立ちの一鉢が熱海の別荘と交換を申し込まれたと言う逸話もこの頃です。

昭和9年には官民一体で「新潟県春蘭協会」が設立され、初代会長の小田喜平太氏は様々な取り組みを革新的に行い、昭和の春蘭ブームをさらに盛り上げていくのです。

戦前の春蘭界においては石油王「中野忠太郎」氏の存在を挙げないわけには行きませんが、実際に石油王と呼ばれたのは先代の中野貫一翁であり、忠太郎の代には石油採掘業は既に全盛を過ぎていましたが、それでも五百町歩を有する県内有数の大富豪でした。中野家は金津村で代々庄屋を務める大地主で、明治初年から採掘を続けること、実に30年、遂に、自分の所有地で商業規模の油田を掘り当て、当時の二大石油会社であった日本石油、宝田石油に次いで中央石油を設立、明治、大正時代に「石油王」と呼ばれました。昭和3年家督を継いだ忠太郎氏は、実業家であるというよりも一級の趣味人で、書画骨董では名うての収集家で、その収集は膨大な数で、中には国宝 12点、重要文化財30点も有るほか、貫一翁と二代に亘り県下一の庭師を集め、49年の歳月をかけて12,000坪の庭園を築庭した。

彼は当初、「日暮しの五葉松」など最高の名品盆栽に熱中していましたが、園芸業者の長尾次太郎氏に春蘭を勧められる内、いつしか埋没して行き、類の無い珍品、稀少品、優品であれば価格を問わず購入しました。彼の場合、小林氏のような投機目的ではなく、単なる道楽に過ぎませんが、その買いつぷりは凄まじく、昭和10年代、山採り無銘の海のものとも山のものとも知れない蘭三条に、蘭商達が3千円で寄りつくくと、直ちにその4倍の値で買い取ったり、紺覆黄金中透の「錦王冠」を何十万円で売買した蘭商は、一日で大金持ちになったという逸話が残っています。

しかし、彼の功績は大胆那として、昭和10年代における春蘭界に潤沢な資金の流れを作り、ブームを盛り上がらせ、蘭商達に与える資金の源泉として欠くことのできない存在であり、それはあたかも涸れることのない豊かな油田にも似た、大きな意味を持っていたのです。

上記は1986年刊行の保育社「春蘭」からそのまま抜粋したのですが、一部当館で加筆省略修正しております。原文にできるかぎり忠実にという意味合いから中野家に関する記述も一部誤記載がありますが文脈を生かす都合上そのまま掲載致しましたのでご了承下さい。